

あの日を取り戻せ

前田耕陽

暗転の中アンコールの大歓声が響き渡る
明転すると大歓声！

舞台袖から一人の男(中嶋)が出てくる

中嶋「アンコールありがとう！今日は最高にHappyだぜ……………」

それではアンコールにお応えして今日最後の曲、聴いてください

手紙」

手紙イントロ流れる

中嶋歌いだす。

手紙

あれからしばらく 時は流れ 街並みも 変わり果てたけど

テレビを彩る 人の中の 片隅で もがき続けた

僕らがいたね 確かにいたね あの頃は

思うまま 動けずに 悔しさになみだした日々が続いてたね

あれからしばらく 時は流れ 頭の中 記憶をたどれば

みんなで話した 夢に向かい 長い道を 歩き始めた

僕らがいたね 輝いてたね あの頃に

もう少し 大人なら 壊れる事にならず続いていたかもね

やり残した 事があるね 今ならば あの頃を

取り戻し 歌えるね 心に思うままに翼広げ

空高く はばたける 誰にも真似すること出来ない僕らだから

歌終わり暗転

場内アナウンスが流れる

「以上を持ちま〜つ Mitsuru Nakashima Japan Tour

2004を終〜こす。

10年後

何処かの古アパートのような六畳一間にちゃぶ台があり、缶ビールや焼酎の空き瓶などが散らかっている。

そこに一人の男が入ってくる。

何か疲れたような感じで、背中にギターを抱えている。

中嶋「ただいま！」

・・・

中嶋「ただいま！」

・・・

中嶋「そうだよな、返事があるわけないよな、誰もいないもんな、みりゃわかるよな、誰もいないって、ってか見なくてもわかるよな、一人で暮らしてるんだら、でも言っちゃうんだよな、というか言いたんだよな、ただいまって、うん、言いたんだよ、だから言っんだよな、なんか家帰った時この言葉言わないとダメな男みたいな感じするもんな」

中嶋、散らかった部屋を見て

中嶋「あゝあ、こんなに散らかして、出かける前にちゃんと片付けてからでかなさいって言ってるのにな、なんでわかんないかな、疲れて帰ってきて片付ける時の気持ちを考えろって言うのー全くさ」

中嶋、散らかった部屋を片付け始める。

一通り片付け終わると。

何処かいいところに座る。

中嶋「ふー、さてと飲みますか？」

そしてポケットの中に詰め込んだ小銭と千円札を何枚か出して数え始める。

中嶋「えーと、千円、三百四拾二円か！ハハハッ、全然ダメだなこりゃ、、、もっとこつ太

っ腹な人が来ないもんかね。あの千円いれてくれたお兄さん格好良かったな〜！ニコニコしながらお金入れてくれたもんな〜。明日も来ないかな〜！あーあ、どっかに兄ちゃん頑張ってた〜とか言って一万円ぐらい入れてくれる人いないかな〜っていうかあそこ若者しかいなかったもんな〜。聴いてはくれるけど聴いてるだけだもんな〜！うん明日は場所代えるか、もっとこうセシブの人が通りそうな場所がいいな！うん、白金とかかな。いや待てよ？白金とか住んでる人は、わざわざ立ち止まって路上で歌ってる奴の歌なんか聴かないか、うん、うん何処にしようかな〜！どっかいいところないかな？」

などと言いながらギターに手を伸ばす。

ケースから出してチューニングを始める。

中嶋「うーん、何がいけないのかな？立ち止まって聞いてくれる人は喜んでくれるんだけどな、立ち止まらせるのが大変なんだよな。歌が暗いのかな？」

とギターを弾きながら歌い始める。

するとドアをノックする音が響く。

しかし中嶋は歌に入り込んでいて全く気づく様子がない。

しほげくするとドアを開けてものすごい剣幕で男（マー）が怒鳴り込んでくる。

マー「おいーうるせ〜んだよ！今何時だと思ってるんだよー！」

中嶋「っ〜っ〜」

マー「黙ってねーでなんとか言えよー！」

中嶋「、、、、、、」

マー「おいー聞こえてんのかよ〜うるせーって言ってんのー！」

中嶋「、、、、、、おちら様ですかっ〜」

マー「どちら様じゃねーよ、お前のその下手くそなギターの音と若干音が外れてる歌声がうるせーって言ってんだよ、毎晩毎晩、隣で聞かされるもの身にもなってみろってよ。」

中嶋なぜか喜んで

中嶋「あー、お隣さんでしたか、それはそれは、さーさー、、、ごめいごめいごめい、あ、あ、ちよっと散らかってますけどね、まーまー座ってください。」

マー「んっいっや、そっついっごことじやなくて」

中嶋「まーまー、そう硬くならないで、お隣さんなんですから、さ、さ、どうぞどうぞー」

中嶋、マーを無理やり座らせる。

中嶋「いや、なんもないんですけどね、あービールで良いですか？」

マー「いや、ビールは」

中嶋「あつ、焼酎ー芋焼酎どうですか、イヤね、先日友人にもらいましてね、なんかプレミア焼酎らしいんですけどね？ほら一人で飲んでも味気ないじゃないですか？ねー、あつ

氷ないんでお湯割りで良いですか？」

マー「あ、あのねー」

中嶋「まー、いいじゃないですか、お隣さんなんですから、お兄さんいける口なんですよ？」

マー「えっ、いや、まー」

中嶋「じゃーいいじゃないですか！飲みましょっよー」

マー「いや、そういうことじゃなくっ」

中嶋「さーさー、固いことはいいいっこないで、今日は私のおごりですから、」

中嶋も腰を下ろしながら

中嶋「あゝそうですか、お隣にね、あつ乾杯！」

マー「あつ、はら」

中嶋「で、どうですか？」

マー「はっ」

中嶋「いや、いつから住んでるんですか？」

マー「あー、半年ぐらい前からです。」

中嶋「へー、半年もーあつそう、そうか、全然気づかなかったな〜！あつ、私ね中嶋と
言います。お兄さんは？」

マー「、、、中嶋」

中嶋「いやいや、中嶋です。なかしまねーしまは江戸に島ね、それで中嶋、お兄さん
はっ」

マー「中嶋」

中嶋「いやだから、ナカンマですよ、中嶋満です。満タンの満と書いてみてるね。でお兄さん
んはっほら名前で読んだ方が親近感あるでしょー」

マーちょっと困ったように

マー「えっとく、く、く、く、く、く、く、」

中嶋「あー江藤さんね、江藤何さん？」

マー「チゲーヨー！」

中嶋「ちげよ？江藤ちげよ？」

マー「いや、中島勝です。」

中嶋「???」

マー「だから、俺の名前は中嶋勝!!」

中嶋「??江藤は？先ほど江藤と仰ってましたよね？」

マー「江藤なんて言ってるよー！」

中嶋「・・・」

マー「えっとくって言ったたらあんたが勝手に勘違いしたんだよー！」

中嶋「あーそうでしたか、それは失礼!・・・えっ、じゃーちげよは？」

マー「だから、それも、違っよ！って言ったの」

中嶋「あつなるほど、そういうことでしたか、それは失礼しました。。そうでしたか、中島さんね、勝君、うん、マークん、マー君で良いですか？」

マー「はっ？」

中嶋「だって勝君でしょ？勝君って呼ぶのもなんか堅苦しいし、勝っていきなり呼び捨てるのもねく、なのでマー君。うんマー君が呼びやすくっていいね。」

マー「はー、まー」

中嶋、マーのことを見つめながら

中嶋「マー君!..!..!」

マー「・・・」

中嶋、男の方に少し寄りながら明らかに変な空気感が生まれる

中嶋「マー君!..!..!」

マー「・・・何？」

中嶋、離れながら

中嶋「あ、すいません。いやなんというか、その、こうやって家に人が訪ねてきてくれるのが
久しぶりなんでね」

マー「……………」

中嶋「で、マー君はいくつ？仕事は何してるの？彼女は？」

マー「28歳！現場監督！彼女は……………ってか初対面なのに、彼女は？とかそんな踏み込んだと
ころまでよく聞けますね？」

中嶋「あ、コメントコメント！……………でもさーよく訪ねてきてくれたよね？なんでまた僕の部屋
を訪ねてくれたの？やっぱりあれ？マー君もあんまり友達いないとか？」

マー「いや、友達はたくさんいますよーそうじゃなくて、……………おじさんのギターと」

中嶋「おじさん？？？俺？」

マー「そー」

中嶋「おじさんはないでしょー俺だって45だよ？おじさんって……………そりゃないよー！」

マー「いや、45はおじさんでしょー！」

中嶋「え、そっなの？でもさ、おじさんって言われるとちょっと入こむな〜！そっだ、みっち
や〜」

マー「……………」

中嶋「ミッチちゃんではないよ。で俺のギターがなに？」

マー「あーそっすっ、そのおじさん……………ミッチちゃんのギターと歌声がね……………」

中嶋「え？聞こえてた？あそっうーで、どうでした？」

マー「……………」

中嶋「歌、聞こえてたんでしょ？」

マー「えー」

中嶋「その俺の歌、どうだった？」

マー「いやその……………言われてもね……………その……………」

中嶋「なんかあるでしょ？聞こえてたんだったらさ」

マー「その……………」

中嶋「……………」

マー「……………」

中嶋「……………」

マー「……………」

中嶋「そっか……………うんさいか、ごめんね、そっか……………うんさいのか、この曲は世間の人が聴くと
……………認識になるのか」

マー「いや、そういうことでなくて、ただ時間も時間だし、第一壁越しに聞こえてくるだけだからよくわからないし、、、、、歌がどうとかそういう問題じゃないんです。毎晩毎晩ガシャガシャ聞こえてくるのが耳障りなんです。」

中嶋「がしゃがしゃ？えっ？がしゃがしゃ？・・・がしゃがしゃはないでしょ？だってこの歌バラードだよ？」

マー「いやいや、だから、歌のことを言ってる訳じゃないの。はっきり言ってどんな歌とかメロディーだとか、バラードだとかなんだとか、そんなことはわからないんですよ、壁越しにね、ギターの音とおじさんの声が、こっずつと伝わってくるんですよ。シヤカシヤカシヤカってね」

中嶋「あー、要するにうるさいってことだね？」

マー「最初からそういうってるじゃない」

中嶋「そうかそうか、いやごめんね、あっ、じゃーさー歌はちゃんと聞いてないということだよね？よかったです、いや俺の歌がうるさいのかと思っちゃったよ」

マー「いや、うるさいのはうるさいんですよ、ただね、曲がどうのこののとか判断できるほど明確に聞こえてはこないというだけだね」

中嶋「なるほど、じゃーさ、ちょっと聴いてくれない？今歌っからさ」

マー「えっ」

中嶋「だってちゃんと聴いとことないんですよ、それじゃ感想言えないじゃん、だからうるさいとかになっちゃうんですよ？」

マー「そういうことじゃなくっ」

中嶋「じゃーなにっ？」

マー「だから、そもそも俺がここにきたのはね、そのギターと歌がうるさいからちょっと静かにしてもらえませんかと注意してきたの。そしたらおじさん、が勘違いして、部屋にあがって酒でも飲んでいけなんて言っからさ、まー俺も酒飲むのは嫌いじゃないし、それにお隣さんだしこの機会に仲良くなってもいいかななんて思っさ、注意するの忘れちゃったんだけどね。」

中嶋「・・・」

マー「・・・ほらでもそのおかげでこっやっておじさんと酒飲む関係になったんだからさ、そなたもこっやっておじさんと酒飲む関係になっただけだ」

中嶋「・・・みっちゃんー」

マー「??」

中嶋「だから、俺はみっちゃん」

マー「??」

中嶋「俺の名前はミツちゃん、おじさんって言うのやめてもらえるかな？おじさんって言われると、なんだかもう疲れちゃってる人みたいじゃない。俺はね疲れてないの、ね、わかる？夢と希望に満ちあふれている人生を送ってるんだからさ、おじさんって言わないでほしいんだよね、」

マー「あゝはいはい、みっちゃんね！みっちゃん！でミツちゃんは仕事何してるの？毎晩毎晩ギターもって歌ってるけどさ、歌手なの？」

中嶋「???しらない？俺のことしらない？」

マー「えゝ、今日初めてあった訳だし」

中嶋「マー君は今いくつっていったけ？」

マー「28さいだけど？」

中嶋「28か、じゃーギリギリだな！兄弟は？お兄ちゃんとか弟とか、」

マー「一人っ子だけど」

中嶋「そうか、それじゃアウトだな！」

マー「アウトって、」

中嶋「いやいやね、その年齢だと知らないなと思ってね、兄弟でもいればギリギリわかるのかななんて思ったりもしたんだけどね。。。そうなんですぅよ、歌手なんですよ、昔はね歌番組なんかよく出たりしてたんだけどね、ベストテンとかヒットスタジオとかね、」

マー「……………」

中嶋「あれ？知らないの？じゃーさ、ヤンヤンは？ヤンヤン歌うスタジオ！レッツゴーアイドルとかは？」

マー「……………」

中嶋「そうか、知らないか、」

マー「うたばん、HEYHEYHEY!」

中嶋「あゝ、最近のやつね」

マー「最近?…だいぶ古いですけどね」

中嶋「そうなの？いや、でもほら、最近は地味な音楽活動しかしてないからさあ、でもね紅白は一回でたことあるよー」

マー「へゝそうなんだ！えっ？なにじゃーミツちゃんは有名人なの？うわっすげー！俺有名人としゃべってるの？ってか一緒に飲んじゃってるよゝ！なんか興奮するな！」

中嶋「いやいやあの、」

マー「握手してー」

中嶋「は〜」

マー「いやほら、有名人と飲める機会なんてそうはないからさ、あつ写メとさうー写メ！ハイチーズ！」

中嶋「つられてポーズをとる」

マー「そうか、有名人なんだ。で今も歌ってるの？」

中嶋「まーね、でもね、なかなかうまくいかなくてね、最近は歌番組なんかも減っちゃってるしね、バイトしながら時間ができたらね、駅前とか公園でね」

マー「ライブとかは？」

中嶋「少し前まではやってただけだね、ライブハウスもねノルマが有ったりしてなかなか厳しいんだよね。だからさ、歌いたいときは駅前とか公園で歌うようにしてる訳ですよ。で、新曲とかも作らなきゃ行けないからね。．．．あつ、じゃんじゃん飲んでね、今日はほら俺のおごりだから遠慮しないでね」

中嶋、マーのグラスに酒を継ぐ

マー「あつどうも、ふん、そうなんだ。公園でね、なんか寂しいね！」

中嶋「ん？寂しい？なんで？」

マー「だってさ、昔はテレビとかバンバン出てたんでしょ？紅白に出たってぐらいなんだからお金もめちゃくちゃ稼いだでしょ？外車とか乗りまくって、銀座とか六本木で遊び回ったりしてたでしょ？女の子にもモテただろうし．．．それが今はこんなポロアパートで風呂無し共同便所、冷蔵庫もないような暮らしてるし、なんか生活に困ってるって感じ丸出しだもんね。」

中嶋「．．．」

マー「あつ、ごめんなんか失礼な事言っちゃいましたね。」

中嶋「別に良いよ、本当の事だし．．．」

マー「ぶっちゃけいくらぐらい稼いでたの？一番売れてるとき．．．」

中嶋「．．．年収8千万ぐらいかな」

マー「ひょえ〜〜〜！すげーな。8千万って、それが何年ぐらい続いたの？」

中嶋「5年ぐらいかな」

マー「5年x5万って！．．．4億！ミッチちゃん4億も稼いでたの？」

中嶋「いや、8千万は一番良いときで後は6千万ぐらいです。」

マー「でも3億以上は稼いでたわけでしょ？すげーな」

中嶋「いやいや、たまたまですよ」

マー「で、そのお金はどうしたの？」

中嶋「……」

マー「だって3億なんてお金使うのはそう簡単じゃないですよ、どんな贅沢したんですか？」

中嶋「してません」

マー「じゃ〜ギャンブル？競馬とか、パチンコとか？」

中嶋「違いますよ、ってかパチンコで3億も使えないでしょ！」

マー「じゃー株だー株でー発当てようとかしたんじゃないの？ダメだよ素人が株に手を出しち

ゃさ、、、痛い目に合うよ！っていかもう有っちゃったのか！ハハハ！」

中嶋「違います」

マー「それも違う！……じゃーなに？」

中嶋「……その……」

マー「あ〜ひょっとして何人もの若い女の子に貢いだとか？若い娘つかまえちゃお小遣いとか言ってお金渡したりとかしてたんでしょ？」

中嶋「うっ、、」

マー「嘘〜マジで？そうなの？この〜工口親父！！この〜中嶋すげこまし〜」

中嶋「半分あたってます」

マー「？？？？」

中嶋「確かに若い子でした。でもね、愛してたんですよ！！」

マー「……」

中嶋「本気で愛してたんです。貢とかお小遣いとかそんなんじゃないです」

マー「でも向こうは遊びだった」

中嶋「違いますよー向こうも愛してくれました。私以外の男には興味ない、私の事幸せにしてね？と何度も何度も言われたし。私もそのつもりでした。」

マー「ありゃ〜そりゃあれだよ！ほら、若い子はさ、そう言っ事簡単に言っつから、お金もらえるならどんな事でも言えちゃうんだから」

中嶋「ちが〜〜〜〜」

マー「うわっ！何よいきなり大声で、、、、いや、気持ちは解るけどね、ミッチちゃんきつとお金たくさん持っちゃったから解らなくなっちゃったんだよ。もし俺がそんな大金稼いだらさ、堅実に使ってさ今こんな所に住んでないと思うもん。いや、気持ちは解るけどね」

中嶋「あんたに何が解るんだい！えっ？あんたに俺たちの何が解るんだよ！俺たちはちゃんと愛し合って結婚して、子供にも恵まれてね、娘が一人、幸せな家庭をちゃんと作ってんだよーそこの女と一緒にするな！」

マー「……………すみません……………」

中嶋「あっ、こちらこそすみません。つい熱くなってしまうして」

マー「そうなんですか、結婚されてたんですか」

中嶋「今もしてるよ。」

マー「……………ええっ？今も？」

中嶋「そうだよ」

マー「奥さんと娘さんは？」

中嶋「ふうっ！あんださ、さっさから嫌な事、嫌な事、ぐいぐい言ってくるね。」

マー「すみません、そのちょっと気になってしまってます……この部屋に三人で生活するのは厳しいだろうとか、お風呂はぐっしているのかなとか、いやほら、銭湯って言ったって一駅電車乗らなきゃ無いでしょ？それにこの部屋冷蔵庫もないし……その、食事とか、……、そもそもこの部屋に家族で暮らしているといつにおいがかかったもので……」

中嶋「……にはいないよー」

マー「……………」

中嶋「こんな狭いところに三人で生活なんてできないだろー！」

マー「ではび自宅が別に有るという事ですか？奥さんとお子さんはそれじゃくっしてんよ」

中嶋「……これが俺の自宅だ」

マー「……………全く話が読めないのですが」

中嶋「読めなくて良いです」

マー「離婚したという事ですか？」

中嶋「離婚はしてない」

マー「……………」

中嶋「……………」

マー「……………」

続く